

量子物理学特論

第7回

1次元の量子系（復習）

シュレディンガー方程式

$$i\hbar \frac{\partial \psi(x, t)}{\partial t} = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{\partial^2 \psi(x, t)}{\partial x^2} + V(x)\psi(x, t)$$

変数分離して，固有値方程式に注目 $\psi(x, t) = e^{-\frac{iEt}{\hbar}} \phi(x)$

$$-\frac{\hbar^2}{2m} \frac{d^2 \phi(x)}{dx^2} + V(x)\phi(x) = E\phi(x)$$

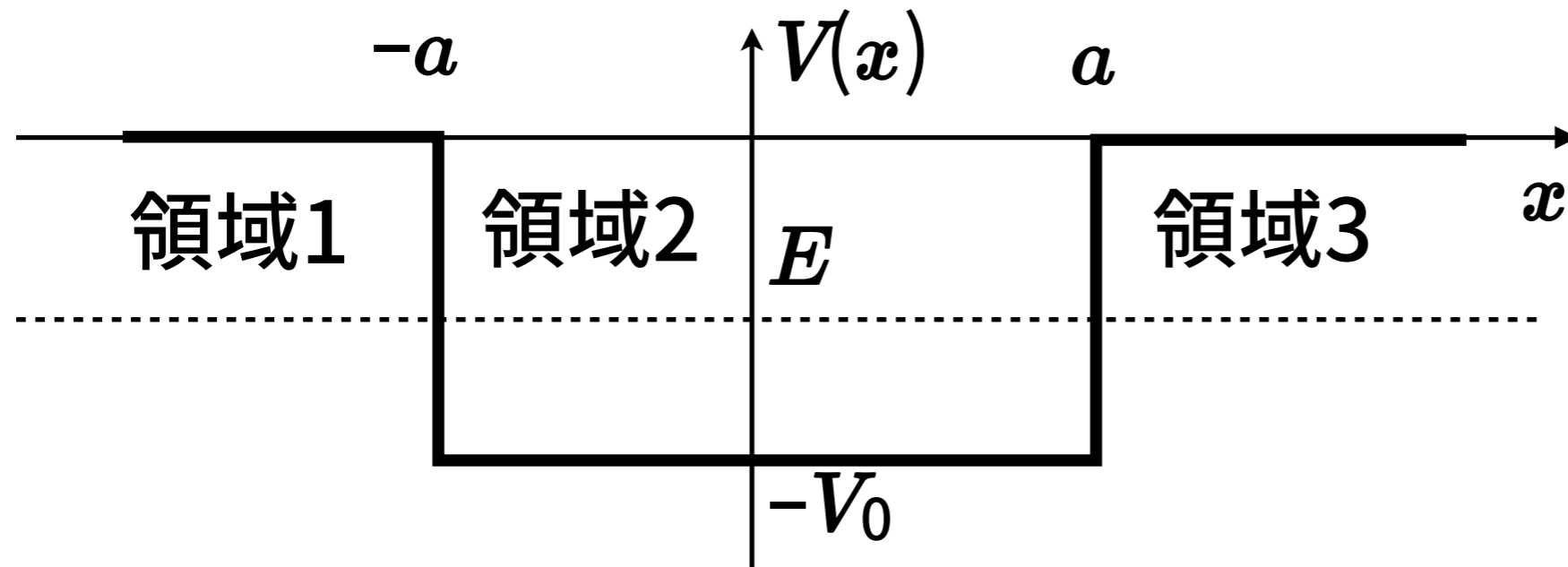
定数ポテンシャルの場合

$E > V_0$ の場合 $E - V_0 = \frac{\hbar^2 k^2}{2m}$ として $\phi(x) = Ae^{ikx} + Be^{-ikx}$

$E < V_0$ の場合 $V_0 - E = \frac{\hbar^2 \rho^2}{2m}$ として $\phi(x) = Ce^{\rho x} + De^{-\rho x}$

束縛状態

井戸型ポテンシャルによる束縛を考える。 $0 > E > -V_0$



$x \rightarrow \pm\infty$ で波動関数が0に収束することから、

領域1 : $\phi_1 = Ae^{\rho x}$

領域2 : $\phi_2 = B'e^{ikx} + C'e^{-ikx} = B \sin kx + C \cos kx$

領域3 : $\phi_3 = De^{-\rho x}$ $\rho = \sqrt{\frac{-2mE}{\hbar^2}}$ $k = \sqrt{\frac{2m(V_0 + E)}{\hbar^2}}$

境界でなめらかにつなぐ

$$x = -a \quad Ae^{-\rho a} = -B \sin ka + C \cos ka$$

$$A\rho e^{-\rho a} = Bk \cos ka + Ck \sin ka$$

$$x = a \quad De^{-\rho a} = B \sin ka + C \cos ka$$

$$-\rho De^{-\rho a} = Bk \cos ka - Ck \sin ka$$

これらより,

$$\rho = k \frac{B \cos ka + C \sin ka}{-B \sin ka + C \cos ka} = k \frac{-B \cos ka + C \sin ka}{B \sin ka + C \cos ka}$$

ゆえに $BC = 0$

$$\phi_2 = B \sin kx \quad \text{または} \quad \phi_2 = C \cos kx$$

のどちらかである。

エネルギー固有値

(i) $\phi_2 = C \cos kx$ のとき $\rho = k \tan ka$

(ii) $\phi_2 = B \sin kx$ のとき $\rho = -k \cot ka$

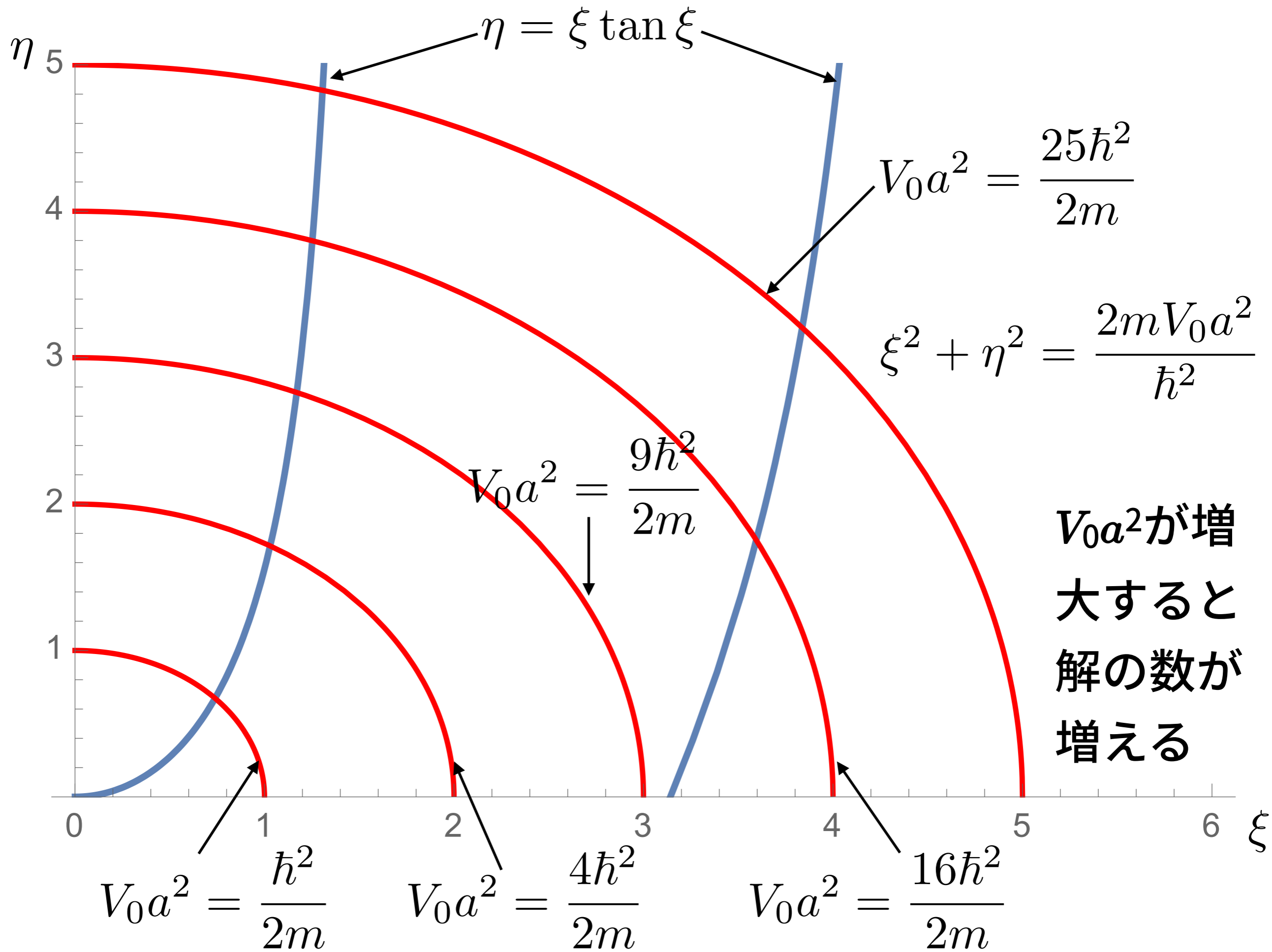
(i)の場合 $ka = \xi$ $\rho a = \eta$ とすると, $\eta = \xi \tan \xi$

$$\rho = \sqrt{\frac{-2mE}{\hbar^2}} \quad k = \sqrt{\frac{2m(V_0 + E)}{\hbar^2}} \quad \longrightarrow \quad \xi^2 + \eta^2 = \frac{2mV_0a^2}{\hbar^2}$$

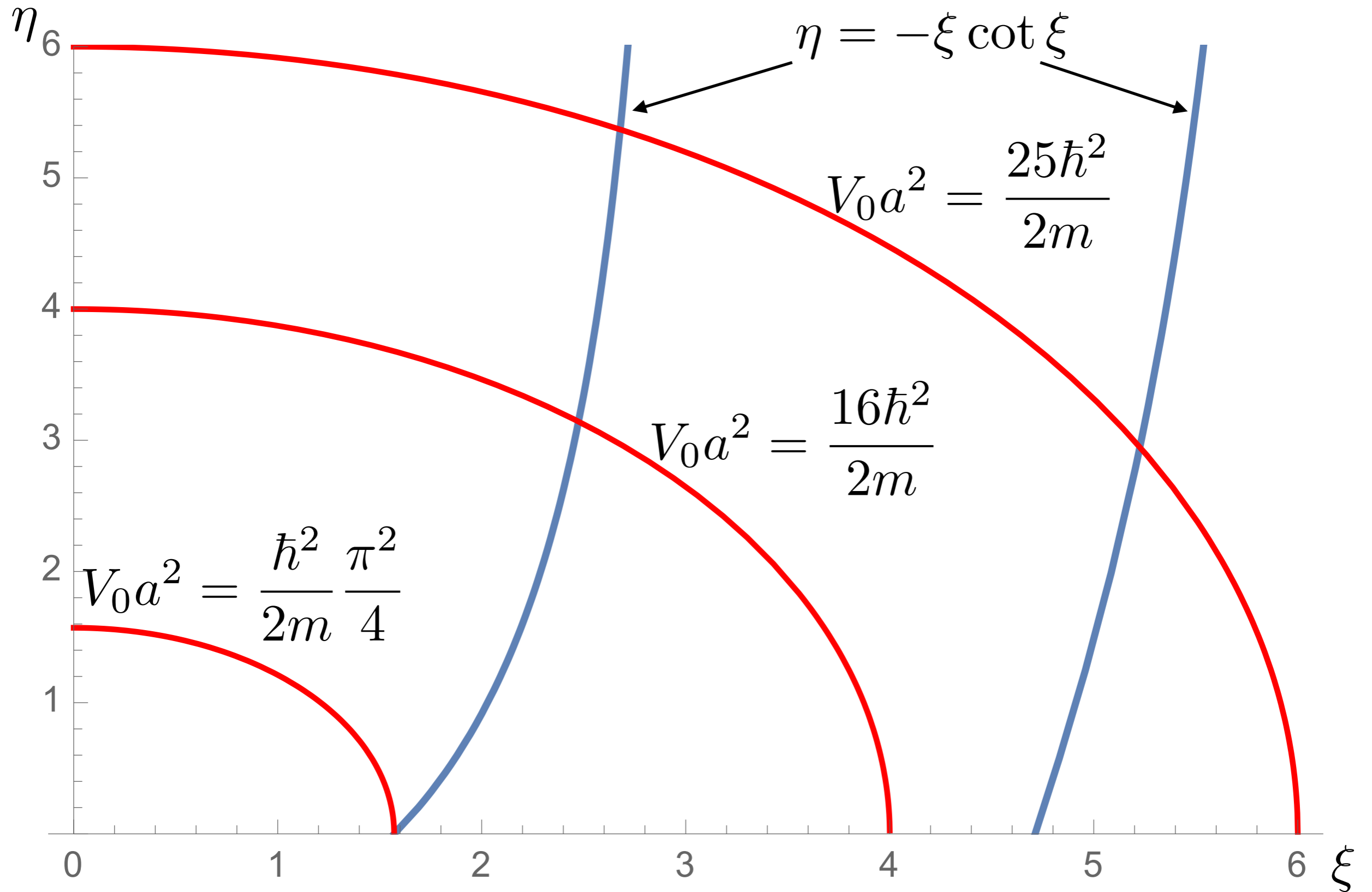
$$\eta = \xi \tan \xi$$

$$\xi^2 + \eta^2 = \frac{2mV_0a^2}{\hbar^2}$$

の両方を満たす必要がある!



(ii)の場合 $\eta = -\xi \cot \xi$



パリティ

先ほど見たように、 $V(x)=V(-x)$ の場合には、束縛状態の波動関数は x を $x \rightarrow -x$ としたときに

★ x の偶関数 $\phi(-x) = \phi(x)$ パリティが偶

★ x の奇関数 $\phi(-x) = -\phi(x)$ パリティが奇

のどちらかになる。

解が決まったパリティを持つときは、エネルギー準位の決定が簡単になる。

解が奇関数ならば、 $\phi(0)=0$ 、偶関数であれば、 $\phi'(0)=0$ として解を求めれば良い。

井戸型ポテンシャルの例

偶関数の解を求める。

$$\begin{aligned} 0 < x < a & \quad \phi_2(x) = C \cos kx & \longleftarrow \frac{d\phi_2(0)}{dx} = 0 \\ x \geq a & \quad \phi_3(x) = D e^{-\rho x} \end{aligned}$$

$x = a$ における連続性から、

$$\begin{aligned} D e^{-\rho a} &= C \cos ka \\ -D \rho e^{-\rho a} &= -C k \sin ka \end{aligned}$$

よって、 $\rho = k \tan ka$

同様に、奇関数の場合には $\rho = -k \cot ka$

が簡単にもとまる。

例題

幅 $2a$ ，深さが $-V_0$ の井戸型ポテンシャルを考える。

$2aV_0 = \alpha$ を一定に保ちながら， $a \rightarrow 0$ ， $V_0 \rightarrow \infty$ の
極限を考える。

$$2aV_0 = \alpha \quad \text{とすると，} \quad \xi^2 + \eta^2 = \frac{2mV_0a^2}{\hbar^2} = \frac{m\alpha a}{\hbar^2} \rightarrow 0$$

$$\xi = ka \rightarrow 0 \quad \text{であるから，} \quad \eta = \xi \tan \xi \simeq \xi^2$$

$$\eta + \eta^2 = \frac{m\alpha a}{\hbar^2} \quad \eta \text{も小さいので二次の項を無視すると，}$$

$$\rho a = \eta = \frac{m\alpha a}{\hbar^2} \quad \sqrt{-\frac{2mE}{\hbar^2}} = \frac{m\alpha}{\hbar^2}$$

$$\text{よって，} \quad E = -\frac{m\alpha^2}{2\hbar^2}$$

例題

$V(x) = -2aV_0\delta(x) = -\alpha\delta(x)$ を考える。

デルタ関数ポテンシャルの場合は，波動関数の微分は不連続であり，

$$\left(\frac{d\phi(x)}{dx}\right)_{x=\epsilon} - \left(\frac{d\phi(x)}{dx}\right)_{x=-\epsilon} = -\frac{2m\alpha}{\hbar^2}\phi(0)$$

$$x < 0 \quad \phi(x) = Ae^{\rho x}$$

$$x > 0 \quad \phi(x) = Ae^{-\rho x} \quad \text{より} \quad -2\rho = -\frac{2m\alpha}{\hbar^2}$$

$$E = -\frac{m\alpha^2}{2\hbar^2} \quad \text{先ほどの結果と一致！}$$

[復習]デルタ関数ポテンシャルの場合

$V(x) = V_0\delta(x - x_1)$ の場合

$$\frac{d^2\phi(x)}{dx^2} + \frac{2m}{\hbar^2}(E - V_0\delta(x - x_1))\phi(x) = 0$$

$x_1 - \delta < x < x_1 + \delta$ で積分して、

$$\frac{d\phi(x_1 + \delta)}{dx} - \frac{d\phi(x_1 - \delta)}{dx} = \frac{2m}{\hbar^2} \int_{x_1 - \delta}^{x_1 + \delta} (V_0\delta(x - x_1) - E)\phi(x)dx$$

$\delta \rightarrow 0$ では、

$$\frac{d\phi(x_1+)}{dx} - \frac{d\phi(x_1-)}{dx} = \frac{2m}{\hbar^2} V_0\phi(x_1)$$

この場合、波動関数の **1階微分は不連続**だが、**波動関数は連続**

周期的ポテンシャル

- ★ 金属のように，結晶構造を持つ物質中のイオンが作るポテンシャルを考える。
- ★ 金属中の自由電子の運動をあつかう際に，このようなポテンシャルを考える必要がでてくる。
- ★ $V(x)=V(x+d)$ のような周期的ポテンシャルを考える

$$\hat{H} = \frac{\hat{p}^2}{2m} + V(x) \quad V(x) = V(x + d)$$

平行移動の演算子

周期的ポテンシャルによるハミルトニアン固有関数を探す

このために、平行移動の演算子を考える。

$$\hat{U} = \exp\left(i\frac{\hat{p}}{\hbar}d\right)$$

$$\hat{p} = \frac{\hbar}{i} \frac{\partial}{\partial x} \quad \text{であるから,}$$

$$\hat{U} = \exp\left(d\frac{\partial}{\partial x}\right) = 1 + d\frac{\partial}{\partial x} + \frac{1}{2!}d^2\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \dots$$

$$\hat{U}\phi(x) = \phi(x) + d\frac{\partial\phi(x)}{\partial x} + \frac{1}{2!}d^2\frac{\partial^2\phi(x)}{\partial x^2} + \dots = \phi(x+d)$$

となり、この演算子を波動関数に作用させると $x \rightarrow x+d$ という平行移動に対応することがわかる。

ブロッホの定理

ここで、 $[\hat{U}, \hat{H}] = 0$ であるので、

ハミルトニアン \hat{H} の固有関数は、同時に平行移動演算子 \hat{U} の固有関数になっている。

また、 $\hat{U}^\dagger \hat{U} = 1$ を満たしており、ユニタリーである。

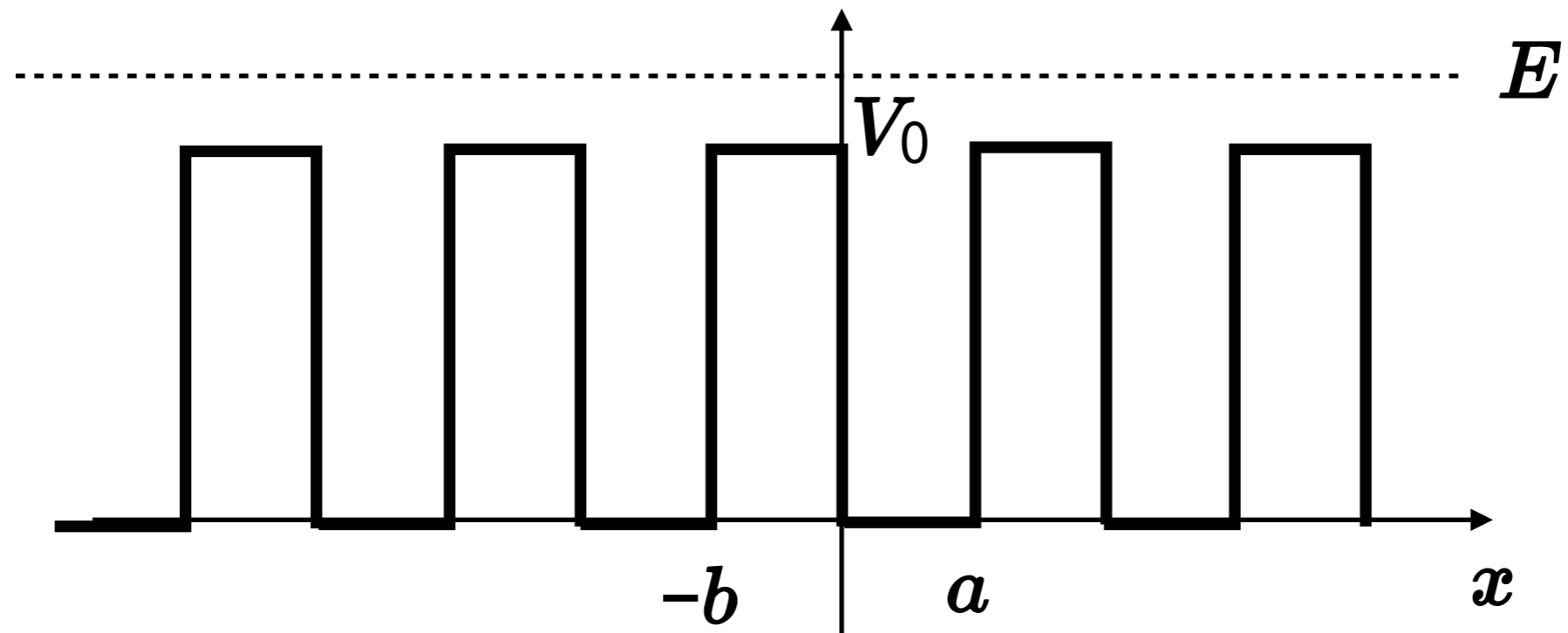
ユニタリー演算子の固有値の絶対値は1になることが知られているので、

$$\hat{U} \phi(x) = e^{i\theta} \phi(x)$$

と書け、したがって、 $\phi(x + d) = e^{i\theta} \phi(x)$ を得る。

ブロッホの定理

周期的ポテンシャル



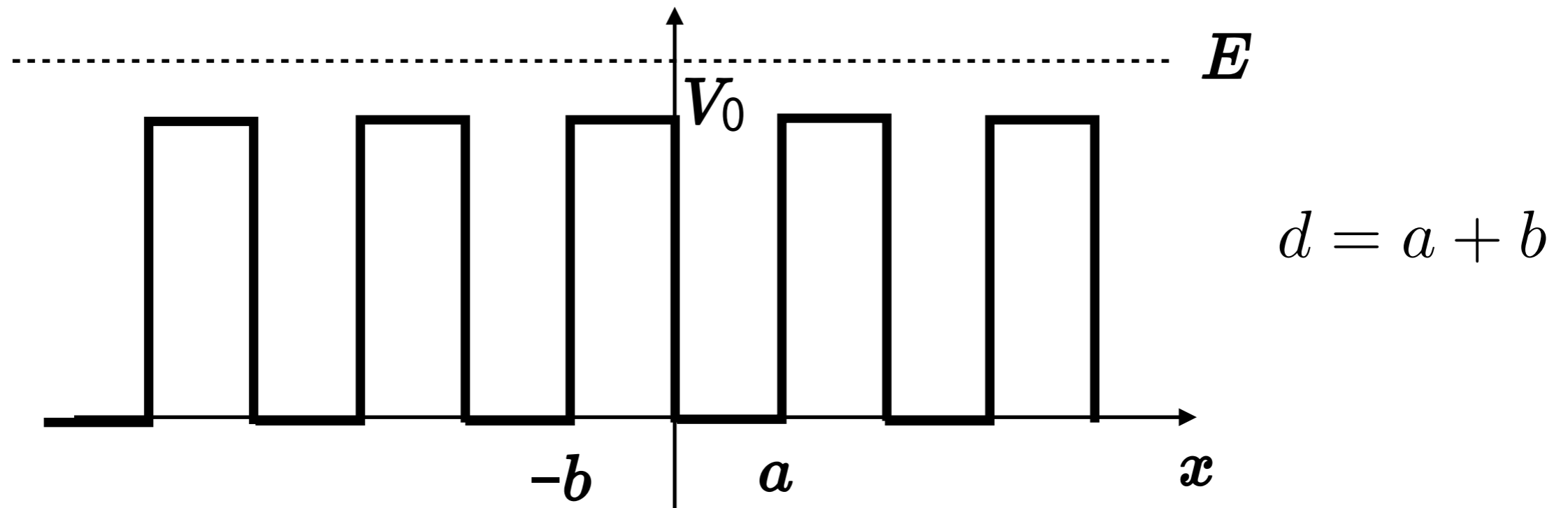
$$0 > x > -b \text{ では } \quad \phi(x) = Ae^{ik_1x} + Be^{-ik_1x}$$

$$a > x > 0 \text{ では } \quad \phi(x) = Ce^{ik_2x} + De^{-ik_2x}$$

$$k_1 = \sqrt{\frac{2m}{\hbar^2}(E - V_0)}$$

$$k_2 = \sqrt{\frac{2mE}{\hbar^2}}$$

周期的ポテンシャル



$0 > x > -b$ では $\phi(x) = Ae^{ik_1x} + Be^{-ik_1x}$

$a > x > 0$ では $\phi(x) = Ce^{ik_2x} + De^{-ik_2x}$

$d > x > a$ では $\phi(x) = e^{i\theta} \left\{ Ae^{ik_1(x-d)} + Be^{-ik_1(x-d)} \right\}$

$a + d > x > d$ では $\phi(x) = e^{i\theta} \left\{ Ce^{ik_2(x-d)} + De^{-ik_2(x-d)} \right\}$

周期的ポテンシャル

$x=0$ および $x=a$ での連続性から

$$A + B = C + D$$

$$k_1(A - B) = k_2(C - D)$$

$$e^{i\theta} (Ae^{-ik_1b} + Be^{ik_1b}) = Ce^{ik_2a} + De^{-ik_2a}$$

$$k_1e^{i\theta} (Ae^{-ik_1b} - Be^{ik_1b}) = k_2 (Ce^{ik_2a} - De^{-ik_2a})$$

ここで、 A, B, C, D が自明な解以外の解をもつためには、

$$\det \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ k_1 & -k_1 & k_2 & -k_2 \\ e^{i\theta} e^{-ik_1b} & e^{i\theta} e^{ik_1b} & -e^{ik_2a} & -e^{-ik_2a} \\ e^{i\theta} k_1 e^{-ik_1b} & -e^{i\theta} k_1 e^{ik_1b} & -k_2 e^{ik_2a} & k_2 e^{-ik_2a} \end{pmatrix} = 0$$

周期的ポテンシャル

$$\det \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ k_1 & -k_1 & k_2 & -k_2 \\ e^{i\theta} e^{-ik_1 b} & e^{i\theta} e^{ik_1 b} & -e^{ik_2 a} & -e^{-ik_2 a} \\ e^{i\theta} k_1 e^{-ik_1 b} & -e^{i\theta} k_1 e^{ik_1 b} & -k_2 e^{ik_2 a} & k_2 e^{-ik_2 a} \end{pmatrix} = 0$$

$$-4e^{i\theta} (-2k_1 k_2 (\cos(bk_1) \cos(ak_2) + \cos \theta) + (k_1^2 + k_2^2) \sin(bk_1) \sin(ak_2)) = 0$$

よって

$$\cos \theta = \cos(ak_2) \cos(bk_1) - \frac{k_1^2 + k_2^2}{2k_1 k_2} \sin(ak_2) \sin(bk_1)$$

$V_0 > E > 0$ の場合も同様の議論により,

$$\cos \theta = \cos(ak_2) \cosh(b\rho) - \frac{k_2^2 - \rho^2}{2k_2 \rho} \sin(ak_2) \sinh(b\rho)$$

$$\rho = \sqrt{\frac{2m}{\hbar^2} (V_0 - E)}$$

バンド構造

$V_0 > E > 0$ のとき

$$\cos \theta = \cos(ak_2) \cosh(b\rho) - \frac{k_2^2 - \rho^2}{2k_2\rho} \sin(ak_2) \sinh(b\rho)$$

より

$$-1 \leq \cos(ak_2) \cosh(b\rho) - \frac{k_2^2 - \rho^2}{2k_2\rho} \sin(ak_2) \sinh(b\rho) \leq 1$$

を満たすようなEの範囲だけが許される。

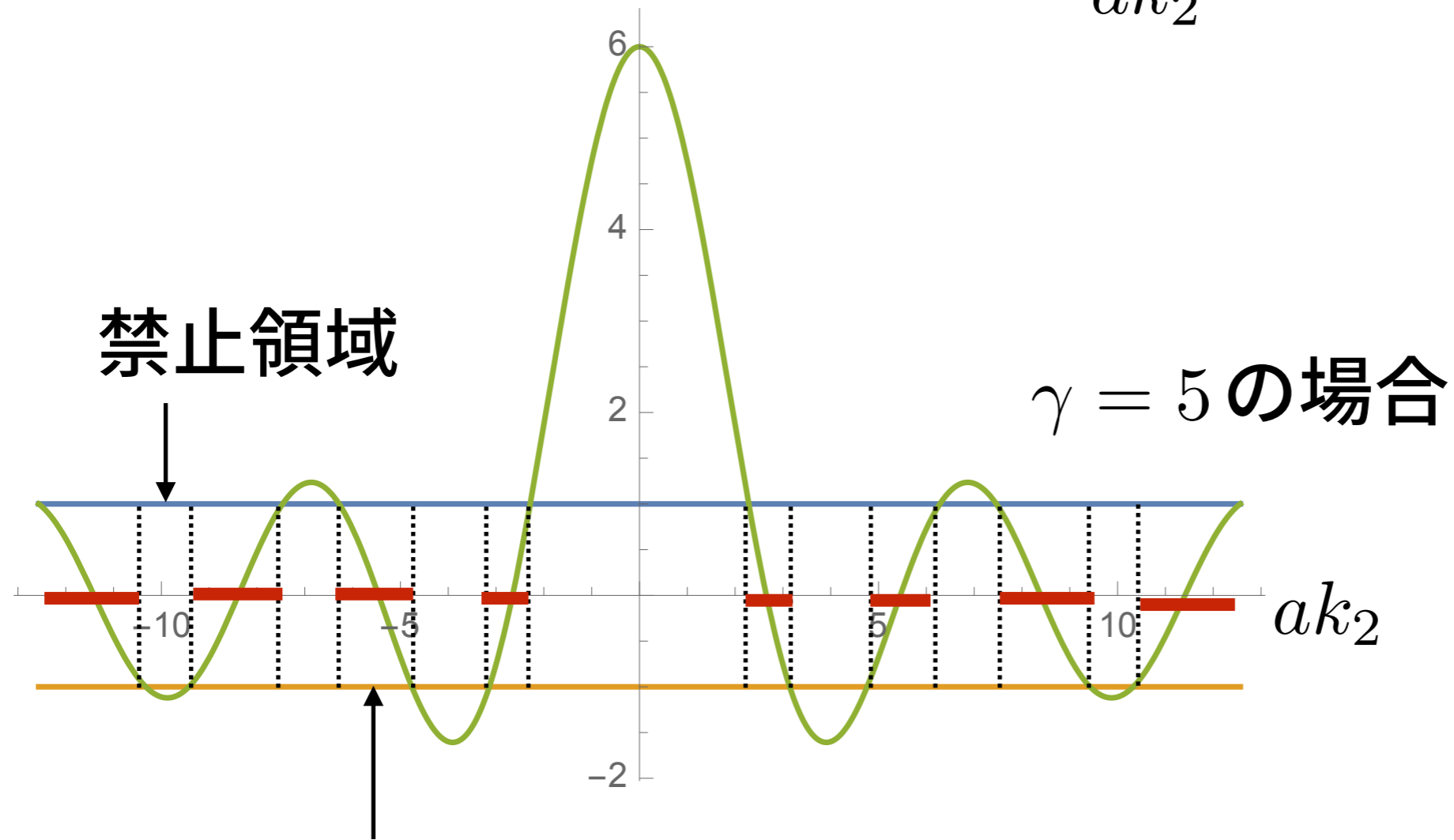
これは、固有エネルギースペクトルのバンド構造を与える。

バンド構造の一般的性質を調べるため、 $b\rho^2$ を一定に保ちながら $b \rightarrow 0$ 、 $V_0 \rightarrow \infty$ の極限をとる。

$$\gamma = \lim_{b \rightarrow 0, \rho \rightarrow \infty} ab\rho^2/2 \quad \text{とおくと,} \quad -1 \leq \cos ak_2 + \gamma \frac{\sin(ak_2)}{ak_2} \leq 1$$

バンド構造

$$-1 \leq \cos ak_2 + \gamma \frac{\sin(ak_2)}{ak_2} \leq 1$$



この領域ではエネルギーは連続的に変化し得る

$E > V_0$ の場合もバンド構造が得られる。